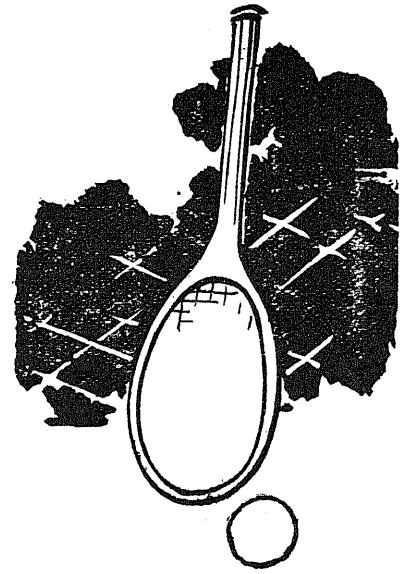

戰場の滿足

林天然

一

天穹高く星滿ちて
　烟霞は靉く木の間なる
篝火影はうすらひて
　駒は蹄に土をかき
狼吼へて物凄く
　四望闊たる荒野原
こゝは何處か遼東の
　王師の屯す野營なり
天邊仰ぎて吟じつる
　年猶若き士官あり
櫛風沐雨しかすがに
　顏やつれて黑けれど
劍を案じてたてる時
　鬼神のそれに髣髴たり

二

世にます人は多けれど
　憂を知らぬはわれのみか
父と母とは打ちそろひ
　兄も妹もすこやかに

妻子なき身ののどけくて
心にかゝる雲はなし
出征の令は下りたり
益良武夫の本懷に
譽を的に戰ひて
萬世不朽の名をあげむ
われを送れる諸人よ
屍を野邊に曝さずば
錦を飾りて還らむと
誓ひし心忘れやは。

三

世界の歴史に我國の
御稜威をあげむ世あらむと
臥薪嘗膽十餘年
刀を研ぎて腕を練り
待ちに待ちたる甲斐ありて
ねがひかなふは敵露西亞
自ら誇る大軍も
人の恐るゝ暴兵も
縱横無盡に蹴ちらして
神州男子の膽みせむ
故里人は鶴首して
われの勳功を期し居ると
君と父兄と友の爲め
奮ひ起たんは我身かな

四

ふりさけみれば冴々と
月は東の山の端
隈なく彼所てらせるも
故郷の空を眺むれば

見ゆるは幽に星ばかり
三五の月よいざとはむ
何をしたまふ我母は
まだ起きつらむかいぬらむか
明日をも知らぬ露の身の
うたふも此世の名殘りにと
拔けば玉散る日本刀
月に閃めく秋水か
血潮沸ぎれる眼には
豺狼の敵もあらなしや。

五

折しも響く喇叭の音
暫しまどろむ兵士の
夢を破りて呼びたてぬ
强き士官は時なりと
故郷の方に打ちむかひ
さらば兩親はらからよ
雄々しくわれは戰ひて
かはる勳功を立てゝみむ
武運拙く死するとも
魂は翔りて東なる
皇國の櫻に宿とりて
花に色香を添なむと
腕をふりつゝ濶歩して
たち出でたるぞ勇ましき。』

ある夜音樂的の小集會に
ものして
友はいくたり
すみれ
絃の音に